

4冊で4冊!

新刊新書 サミング・アップ

持続可能性と人々のよい生き方をキーワードにして、経済の原義である「経世済民」に立ち返り、かつ「制約なくして革新なし」の立場から、グリーン・エコノミーのあり方、課題と展望を論じる。

「エコ税制改革」が有効と提言。地球温暖化対策を進めながら、社会保障制度の改革を行うために、地球温暖化対策税（炭素税）の本格導入を提唱する。それにより、省エネルギーと節電を促進し、CO₂を減らすと同時に、その税収で社会保障税や年金保険料（雇用者負担）を減額。また、ゴミ有料化など「バツズ課税」によるゴミ削減で、焼却炉の建て替えなどを減らし、その分の予算を社会保障に充てるなど、きめ細かい税制改革メニューに踏み込む。

**グリーン・エコノミー
脱原発と温暖化対策の経済学**
吉田文和著



中公新書
882円

**まるわかり政治語事典
目からうろこの精選600語**
塩田潮著



平凡社新書
924円

「出処進退 退き際」の項目に、政治リーダーの本質は出処進退に表れる。首相に制度上の任期はない。国会議員であるかぎり、仮に与党の党首の座を追われても、その気なら、ぎりぎりまで首相を続けることができる。いづどんな形で辞めるかの判断は最後に自分で下さなければならぬ。政権の最終場面に直面した首相が進退を決する場合の決め手となるのは、何よりも政権維持が不可能かどうかという延命の可能性の判断にある、と記す。

政界特有の用語、本来の意味から転じた俗語、隠語、スラング、新語、流行語、政治家の語録からなど、著者秘蔵の「政治語ノート」から600語を厳選して、「言葉で動く政治」の時代を読み解く。

現代では小児の病気として知られる麻疹、水痘、おたふく風邪といった感染症は、小児に対して特に高い感染性を持つわけではない。成人の多くが免疫を持つ社会では、子どもたちが唯一の感受性者となるため、小児疾病のように見えるにすぎないという。

急性感染症が小児疾病ではなかった時代には、数十年置きに突発的に流行する急性感染症は、社会全体に時として壊滅的な影響を与えてきた。人類は感染症との闘いに勝利できるのか。ハイチなどで感染症対策に従事した経験を持つ著者は、病原体の根絶ではなく共生が必要と説く。たとえそれが人類にとって心地よいものではないとしても、古代文明以来続く感染症と人類との関係を振り返る。

**感染症と文明
共生への道**
山本太郎著



岩波新書
756円

出世するなら会社法
佐藤幸幸著



光文社新書
840円

会社法は、経営者と株主を中心とした会社を取り巻く関係者の利害調整に関するルールを定めたもの。

会社法を直接利用する必要はある経営者、企業家、株主、投資家、従業員（使用人）、債権者はもちろん、これから企業に就職するに当たり株式会社の仕事を知りたい学生などにも向けられた、会社法の入門書となっている。

日本の経営者の報酬は、なぜ米国の10分の1なのか。リーマンショック以降、上場会社は相次いで新株発行に走ったが、それはなぜか。破綻した大企業を税金で救うのは是か否か、などをわかりやすく解説。ライブドア事件やブルドックス事件の概要を、会社法の観点から分析しているのも興味深い。